

研究分野のキーワード：身体教育，体育哲学，スポーツ哲学，プラトン

研究紹介

体育やスポーツという言葉から、皆さんはどんなことを思い浮かべますか。学校での授業や部活動、あるいはサッカーや野球、さらには授業での嫌な思い、試合に勝った喜びなどなど。

では、「体育とは何か」「スポーツとは何か」、と問われたらどう考えるでしょうか。実のところ、日本語での体育・スポーツという言葉の意味は混用されている、というのが現状です。英訳と対照するとよくわかりますが、例えば、「体育の日」Health-Sports Day「国民体育大会」National Sports Festival のように、体育とスポーツはほとんど同義に扱われています。ところが、「(筑波大学) 体育専門学群」School of Health and Physical Education のように、体育に Physical Education を当てる場合もあります。「体育」という言葉の日本語の用例を遡って見ますと、後者の Physical Education の訳語すなわち「身体教育」の縮約形であって、もともとは身体に関わる教育概念であったことがわかります。他方、スポーツは sport(s) の音訳ですから、両者は別の意味内容を持つ言葉として考える必要が生じてきます。こうした問題については、研究分野のキーワードに挙げた「体育哲学」「スポーツ哲学」と呼ばれる分野で扱われています。

しかし、体育やスポーツが哲学という学問分野と結びついていることに違和感を覚える人も多いでしょう。どうしても、冒頭のイメージが先行してしまうからです。ところが、古代ギリシアの哲学者であるプラトンやアリストテレスの書物を紐解きますと、彼らでさえ、体育や運動競技について批判（分析）をしていることがわかります。私が関心を持っているプラトンの書物の中にも、「ギュムナスティケー（≒体育）は医術よりも立派である（美しい）」（『ゴルギアス』520B）「(運動選手たちの身体の状態は)眠っているようなもので、健康にとって危険な状態だ」（『国家』404A）「(統治者に必要な教育として男女に同じことを課せなければならないが、その結果、おかしく見えることは)女たちが裸になって、相撲場で男たちといっしょに体を鍛えている場面だろう（だが、見た目のおかしさも、理法が最善と告げるものによって消えていく）」（『国家』452A-D）などと書かれています。

皆さんはどのように受け取りますか。膨大なテキストから一部分を抜き出すと誤解を招きかねませんが、それを承知で敢えて挙げたのは、体育やスポーツが、単に学校で児童・生徒があるいは競技場でスポーツ選手がからだを動かしている、そのような身体運動現象に留まらず、それを問うことは、私たちがこの世界で生きることや人間という存在のあり方そのものを見つめ直すことにも繋がってくる、そのようなことを幾らかでも知ってもらいたかったからです。

体育やスポーツをいつもと違う目線で眺めると、きっと新しい世界が広がってくることでしよう。